

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720339

研究課題名（和文）古代ローマ帝国元首政期における皇帝権力と諸都市との関係についての研究

研究課題名（英文）A study of the relationship between emperors and cities in the early Roman empire

研究代表者

中川 亜希（NAKAGAWA, Aki）

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：80589044

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：ローマの支配が及ぶことにより、地中海世界がどのように変化したのかを考察するため、いくつかの都市を取り上げ、分析した。ローマの著作家たちの記述や碑文、貨幣、建築などを利用し、可能な限りの歴史を再構成し、ローマ征服後の関係性とその背景も探った。史料に限られる中で、征服した都市の宗教と聖域の扱い方からローマとの関係性がうかがえることが分かり、今後、事例を増やして全体的な考察を行うための研究方法を確立できた。

研究成果の概要（英文）：With the aim of investigations of the transformation of the Mediterranean World after Roman conquest I have analysed changes of some cities and its native people. Using literary sources, inscriptions, coins and architecture I have drawn historical images and examined relationship between Rome and native people. As a result it has become clear that we can reveal it also through researches on religion and sanctuaries.

研究分野：古代ローマと諸都市との関係性についての考察

キーワード：古代ローマ 都市 碑文

1. 研究開始当初の背景

ローマ皇帝は、神殿、柱廊、劇場、浴場、橋などの公共建築の建設や修復のための費用を援助し、貧しい子供のために基金を設定して生活費を支給するアリメンタ制度を設立するなどして、主として財政的な支援を行うことによって、帝国内の各地方都市に関与した。皇帝による財政的な貢献は、各都市に残存する碑文によって証明され、そして、しばしば特定の「徳」を示す表現によって称賛された。この場合の「徳」とは、ラテン語の *virtutes* であり、いわゆる美德というよりも、賞賛すべき性質を一言で表現する賛辞である。それらの賛辞は、都市の側による皇帝の評価、あるいは都市において人々が抱いていた皇帝のイメージを表現するものである。皇帝と地方都市との関係性を端的に示すものであると言える。したがって都市において発見された皇帝に関する碑文に注目し、特に都市が皇帝の財政的支援をどのような言葉で表現することによって、皇帝との関係性を明らかに示したのかを調査し、皇帝と地方都市との関係、そしてそれを利用したローマ帝国の支配構造について考察した。その結果、ローマの支配の確立とその背景について考えるためには時代をさかのぼって調査しなければならないことが明らかになった。ローマ皇帝が安定的な支配を行うようになる帝政期には、皇帝と諸都市との関係はほとんどが財政的貢献を通してしかあらわれてこない。しかしより古い時代を見ると、中央のローマと諸共同体との関係は様々な面に及ぶ。またそもそも「帝政期」と呼ばれる時期は、「皇帝」という唯一の独裁者が統治するようになったことは事実であるものの、建前上、共和政が継続していたとされた。したがってより古い時代からの継続した状況を考慮する必要があるのはむしろ当然とも言えるであろう。

そこで本研究では、時代は帝政期ということに固執せず、より広くとらえ、中央のローマという権力と諸共同体との関係性を探ることで、ローマの支配構造を考察していくことにした。その際、文献史料のみではなく、特に私自身のこれまでの研究の蓄積がある碑文、そして貨幣の銘や図像、建築、美術などを用いることにした。

2. 研究の目的

私の研究の主眼は、古代ローマの社会が権力をいかに受容したか、そして権力がいかにそれを利用したか、そしてそれをめぐる各社会層の動きを探ることにある。各社会層の動向に着目し、秩序の安定という視点から社会層の相互関係について研究していくことを目指す。以上の目的を達成することは、現代

の政治状況及び社会状況を理解し、その問題の解決方法を探っていく上での一つの指針になると考える。

都市国家から出発したローマは、周辺の諸共同体を征服し、支配を拡大していった。一度、ローマの支配の中に組み込まれた諸共同体が政治的に注目されることはほぼないと言え、したがってローマの文献史料における記述も少なくなる。しかし少ないながらも史料を拾い、そこから見えてくるものをつなぎ合わせると、ローマ支配下での生き生きとした人々の姿が浮かび上がり、そのことに対するローマの反応も垣間見えてくる。そこで中央のローマという権力と地方都市との関係性、そしてそれを利用した「ローマ帝国」(必ずしも皇帝が支配する国という意味での帝国ではなく、複数の民族を含む広い地域を支配する国という意味での帝国)の支配構造について、考察を試みる。各都市が、いかに権力と妥協を計り、各々の利益を守りつつ、社会全体の秩序が保たれることに貢献していたのか、ということ考察し、権力と社会の関係を探ることによって、「ローマ帝国」の支配構造の新たな側面を描くことを目指す。

3. 研究の方法

本研究の目的は、中央のローマという権力と支配下に置かれた諸共同体との関係性と、それを利用した「ローマ帝国」の支配構造について考察することである。当初は帝政前期(元首政期)、特にローマが、複数の有力貴族が主導していく共和政から帝政へと移行し、一人の独裁者による支配を確立していく時期である後1世紀について調査する予定であった。しかしこの時期のローマの支配の確立について考察するためには、時代をさかのぼってローマの支配による影響を探る必要があることが明らかになった。そこでローマの支配が及んだ際に先住の人々の社会に与えた変化と、その後のローマとの関係性を調査することにした。その際、まずは、これまでの研究から、主要な史料となる碑文の残存状況、それから各都市の政治的、社会的、経済的状况などを把握している北イタリア、さらに初期のローマとの関係性が見えやすいローマ周辺のラティウム地方を対象とし、宗教に焦点を当てることで、ローマ人が到来することによる社会と彼らの心性の変化について考えた。都市における皇帝の存在について考察する際、ローマ帝国における皇帝礼拝の広がりも考えても、宗教に目を向けることが不可欠であるからだ。

諸都市とその聖域の歴史、状況については、ローマの歴史家の記述とその共同体出土の碑文など、限られているため、ローマとの関係の中で辿らざるを得ない。まずは文献史料を中心として、可能な限り共同体の歴史を再

構成した。その上で、共同体出土の碑文、共同体出身者が鑄造に関わった貨幣の銘や図像、建築物、美術などからローマが征服した際、その宗教と聖域とをどのように扱ったのかを調査した。近年、ローマが宗教に関して柔軟であったことが指摘されている。ローマは、時に、ラティウム（ローマ周辺の地方）の古く重要な聖域を自分たちの宗教に取り込むことで、その伝統と権威を利用し、権力の象徴とすることもあった。ローマがラティウムの中で政治的に重要な位置を占めるようになっても、個々の都市の重要な聖域は残り、そのような聖域の祭りにはローマやラティウム全域からの参加者がいた場合もあった。あるいはローマが同じラティウムの他の共同体の重要な聖域に対していわば対抗意識を持ち、自分たちこそが主導権を持っていることを主張するような事例も知られる。支配下に置いた共同体の聖域に対抗するかのよう、都市ローマにその神の聖域を作ることがあった。ローマと他の共同体との関係性は、それらの共同体の宗教の扱いからも見て取れるといえるであろう。そこで宗教を通してローマとの関係性を明らかにし、ローマの支配について考察した。

4. 研究成果

具体的には、まず、北イタリアの重要な都市であったメディオラヌム（現ミラノ）の神域の変化について、現地で文献を収集し、遺跡調査を行なった。ギリシア人の歴史家ポリュビオスの記述などによると、メディオラヌムを建設したとされる先住のケルト人が信仰し、ローマとの戦争の際に頼った女神の神殿が、メディオラヌムに存在したこと、その神殿がローマ人の支配が及ぶことによってローマの女神ミネルヴァの神殿になったことが推測される。さらに、その女神ミネルヴァの神殿は、ローマ帝国のキリスト教化により東方の聖女テクラに捧げられた聖堂になったと考えられる。史料が少ない中で以上のような変化を確認し、本村凌二他著『ローマ帝国と地中海文明を歩く』2013年、講談社の中の論文「ミラノ-ケルト、ローマ、そしてキリスト教」（107-126ページ）として発表した。またさらに同じケルト人が居住していたフランス南部にも調査を広げ、現地で碑文と遺跡を確認し、メディオラヌムの聖域に祀られていたケルトの女神が、ローマの女神ミネルヴァと同一視されていることが分かっているベリサマであるという推測を、「女神ベリサマを訪ねて」（地中海学会月報391号、2016年6・7月）としてまとめた。

次に、ローマ近郊のプラエネステ（現パレストリーナ）で祀られていた女神フォルトゥーナ・プリミゲニアの神域に着目し、分析を行った。フォルトゥーナ・プリミゲニアの神

域は、西地中海で最大の、そして恐らく唯一とも言える超域的な神託所、つまり周辺地域からの参拝者のみではなく、地中海各地からの参拝者がいた神託所で知られる。従来は神託の女神の神域としての地中海世界における重要性と影響について当然のこととされてきたが、近年の研究では疑問が示され、その重要性と影響はむしろ否定されている。しかし遺跡と博物館を訪問し、碑文なども調査した結果、近年の研究の傾向には疑問が感じられた。そこでフォルトゥーナ・プリミゲニアとその聖域に関する史料を網羅的に収集して分析し、また遺跡の調査を行い、幸運の女神と神託の女神という2つの面があった可能性を明らかにした。そしてポエニ戦争でローマを勝利に導いた「ローマ国民の幸運の女神」としてローマの国家祭儀に導入されたが、神託の女神としての面は排除された部分的な分祀と考えられることを指摘した。その背景として、ローマの支配下にあるにもかかわらず、故郷の象徴である女神とその神域を誇示するプラエネステの人々に対して、ローマ人が快く思っていなかったことが考えられる。ローマは無数の共同体を征服していく際に、その神々を、ローマの神々と同一視する場合も、そのまま国家祭儀に導入する場合もあった。あるいはローマには受け入れられず、神々が消滅する場合も、私的に信仰を集めて生き残る場合もあった。ローマがそれら共同体の神々とその神域をどう扱ったのかを調査することで、ローマとその共同体との関係性が明らかになる可能性を指摘した。プラエネステの事例については、2014年6月1日第64回日本西洋史学会大会（立教大学）のシンポジウム「古代地中海世界における聖域と社会」において報告し、浦野聡他著『古代地中海の聖域と社会』2017年、勉誠出版の中の論文「古代ローマ西方の聖域と社会」（173-218ページ）として発表した。

また現在、イタリア中部の他の都市の宗教と聖域とローマとの関係性について、同様の手法で調査を進めている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 件）

〔学会発表〕（計1件）

中川亜希「古代ローマ西方の聖域と社会」第64回日本西洋史学会シンポジウム「古代地中海世界における聖域と社会」（招待講演）2014年6月1日立教大学（東京都豊島区）

〔図書〕（計2件）

浦野聡、上野愼也、師尾晶子、イアン・ラザフォード(竹尾美里訳・解説)、中川亜希、藤井崇、田中創、奈良澤由美『古代地中海の聖域と社会』2017年、勉誠出版、総ページ数414(執筆部分：173-218ページ)

本村凌二、井上秀太郎、中西麻澄、池口守、樋脇博敏、渡辺耕、中川亜希、島田誠、長谷川敬、志内一興、伊藤雅之、橋本資久、宮崎亮、澤田典子、岡田泰介、佐藤昇、田中創、上野愼也、三津間康幸、高橋亮介、大清水裕『ローマ帝国と地中海文明を歩く』2013年、講談社、総ページ数415(執筆部分：107-126)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 亜希 (NAKAGAWA Aki)
東京大学・大学院総合文化研究科
・学術研究員
研究者番号：80589044

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()